

神宮と伊勢のまちを伝える

O I S E S A N N E W S

# お伊勢さんニュース

伊勢文化舎 / 〒516-0008 三重県伊勢市船江 2-22-25 TEL 0596-23-5166 FAX 0596-23-5241 E-mail otayori@isebito.com

第3号



- 企画・発行 伊勢文化舎
- 発行日 令和6年7月1日
- 発行部数 53,000部
- 協力 神宮司庁  
神社本庁  
近畿日本鉄道(株)  
伊勢御遷宮委員会  
伊勢のお木曳行事調査団  
東京大神宮

御聴許奉祝 木遣り唄

天下泰平 令和の御代に

古き例の 御遷宮

待ちに待ちたる 御聴許受けて

今日はめでたく 遷宮初日

いよいよ始まる 大宮遷し

心躍らす 伊勢の民

来年から八年かけて行われる二十年に一度のご遷宮。  
古代からの記憶やこころを現代につなぐ、  
『日本文化の遺伝子』のひとつといえます。

いよいよ、次期ご遷宮(令和十五年予定)の準備が始まります。  
来年、令和七年春には最初のお祭り、山口祭、初夏には木曾で御用材を伐り出す御杣始祭が行われます。

今年四月、天皇陛下からの許可「御聴許」を拝したとの発表があり、同日の夜には伊勢神宮奉仕会青年部のみなさんによる「御聴許奉祝 木遣り唄」が宇治橋前で初披露され、五十鈴川河畔では六十三発の花火が高々と打ち上げられました。

## 神宮式年遷宮の準備が始まる！

ご遷宮は二十年に一度、社殿ならびに御装束神宝などを新しく作り替える制度です。同じものを作り替えることにより古代から記憶やこころ(精神)を今につなぐことができました。それは、代々親から子へ様々な性質が遺伝子の働きによって受け継がれてきたように、遷宮は日本人の中で代々継承されてきた、いわば『日本文化の遺伝子』のひとつといえないでしょうか。

### 次期の御敷地は西側から東側へ遷る

さて、ご遷宮まで九年、その時、日本は、また世界はどのようになっているでしょうか。

昔から伊勢では、ご遷宮は「時代の一区切り」だとして、正宮の御敷地の位置が話題になりました。東西に二つ並ぶ西側の御敷地を「金座」(経済・激動の時代)、東側を「米座」(安定・こころの時代)と呼び、その位置によってこの先二十年を占い、言い伝えてきました。神宮にはそのような伝承は存在しませんが、この言い伝えには、多くの人のそれまで暮らしの中で経験した実感と、新しいよい時代を期待する願いが込められているともいえます。

今回の御敷地は「金座」から「米座」に遷ります。無事、ご遷宮が齎行され、世界が平和であり続ける御世を願わずにおられません。

#### 目次

- 2面 遷宮インタビュー  
皇學館大学名誉教授 櫻井治男氏に聞く
- 4面 第六十三回式年遷宮に向かつて  
遷宮の日時定めの沿革について
- 5面 第六十二回 主要諸祭・行事一覧
- 6面 式年遷宮の森を未来へ 前編
- 7面 伊勢のお木曳行事調査団レポートⅠ
- 8面 伊勢志摩のまつり暦・ご案内

内宮古殿地から正殿を望む 撮影 阪本 博文 (写真家・伊勢市在住)

# 式年遷宮にはグローバル化に 飲み込まれない文化が根底にある

令和六年四月、伊勢のまちだけでなく全国に届いた「御聴許」のニュース。いよいよ次期神宮式年遷宮に向けての準備が始まった。ご遷宮を三度経験された皇學館大学の櫻井治男名誉教授に、自らの体験と専門の宗教社会学の立場から令和の時代のご遷宮の意義、また神宮と日本文化について、幅広く話を伺った。

## Q ご遷宮との関わりについて教えてください。

二十一年に一度のご遷宮をこれまで三度身近に接してきました。クライマックスである「遷御の儀」にその都度、何らかの関わりを持ってたことが、遷宮の思い出です。

昭和四十八年（第六十回）が最初で、皇學館大学助手のとき。遷御の夜に奉拝席の誘導係としてご奉仕しました。

二度目の平成五年は、遷御の祭儀奉仕の栄を受け、内院で庭燎という、かがり火のお



はつば姿の櫻井氏。皇學館大学入学の年がお木曳行事第2次（昭和42年）



お白石持奉獻に大学教員や仲間と参加（昭和48年）

聞き手・小紙編集長 中村元美

守り役をさせていただきました。浄闇のときを待つてその灯りを消すと、新宮遷りにより天照大御神が出御、コオロギなど虫の声を止まるほどの静寂で、音の止まった世界を体感しました。二十五年には報道特番の解説として、内宮でご遷御直後の様子を生中継でお伝えしました。

## Q これまでの研究や経験から考える、式年遷宮の意義とはなんでしょうか。

神宮では神道の作法による祭りが数多く行われていますが、それらは大きく区分すると三種となります。

一つは外宮の御饌殿で神々に毎朝毎夕の食事を差し上げる日別朝夕大御饌祭、二つ目は毎年繰り返されている年中祭典で、特に十月の神嘗祭が重んじられ、新穀を最初に神にお供えし、「神嘗正月」ともいわれます。そして三つ目が式年遷宮です。

なぜ二十年ごとに行われるのか明確ではありませんが、毎年の神嘗祭という祭りが、二十年に一度、規模を大きく展開したのがご遷宮。まずはお祀りする神様に瑞々しさを保って永くあり続けてもらい、お力を発揮していただくための、ご神威の発揚でしょう。

ご遷宮は社殿の建て替えというイメージが強いですが、建てるために遷宮をしているのではなく、昔からの「まつりごと」、祭祀の姿を留めていくためではないでしょうか。祭祀を行う上では原点

となる過去の事柄を確認したり、反対に過去の視点から未来を照射し、本来のあるべき姿を見定めようとしています。これは決して過去を懐かしむことではなく、伝統に基づいた新たな創造へと向かうための力となる振り子の運動であり、そこで往き来する時間の重要性を意味します。振り子が往き来する二つの領域を神

## 神宮に流れる循環の営み

### Q 祭祀を伝えるために遷宮を 行い、全てをつくりかえて いるということでしょうか。

社殿はヒノキ材、屋根は萱葺きと、建物の素材は質素であり、彩色して華美な装飾を施すことはありません。建物などに利用された材料は、その後も繰り返し使われています。神宮では過去の遷宮の事例に学び、数百年先を見据えた神宮林の適正管理計画を実行し、長期にわたる循環型の管理が行われ、神宮の豊かな森を持続的に保持する結果を導いています。遷宮が繰り返されることで、森林も守られているのですね。

そうした利用方法について、神道では木々がその勤めを十分果たすため人間が手伝いをしていると考えます。聖なる物を新たに清浄にして大切に使い続けるという思想が表され、循環という繰り返しの時間が、神宮には流れています。

「日本がここに集まる初詣」。毎年神宮への初詣を欠かさなかった山口誓子が詠んだ句です。祈りを捧げるために人が集まるだけでなく、その心も伝統も神宮に集まってくるのですね。



御装束神宝をはじめ遷御奉仕の神宮祭主以下の奉仕員を祓い清める「川原大祓」（外宮・平成25年）



明治13年(1880)、明治天皇の御聖断を仰ぎ、伊勢神宮の遥拝所として建てられたのが「東京皇大神宮遥拝殿」、いまの東京大神宮です。皇室の御祖神である天照大御神をまつり、国民の総氏神と仰がれる伊勢神宮(内宮)の御神徳を皇都東京にあまねく宣布し、都民の心のよりどころとなるようにとの願いから創建され、140年余の歳月が流れました。「東京のお伊勢さま」東京大神宮は、いまも伊勢神宮と都民の心を結んでおります。



東京のお伊勢さま



東京大神宮

〒102-0071 東京都千代田区富士見 2-4-1  
電話 (03) 3262-3566 FAX (03) 3261-4147  
<https://www.tokyodaijingu.or.jp/>

JR総武線・地下鉄東西線・有楽町線・南北線・大江戸線  
「飯田橋駅」徒歩5分



式年遷宮で最も重要な神事「遷御の儀」。神聖な間の中、御神体が新宮に遷る（内宮・平成25年）

# お木曳、お白石持は 神宮と人々が繋がる領域

遷宮でいうところの伝統には、社殿造営と御装束神宝奉製の技術も注目されます。御正宮内に納められる衣装や櫛などの調度品、神々の威厳を表象する刀剣類などは、式年遷宮が制度化された七世紀頃のもの基本と

なっていますが、各時代の職人によって製作され、現在でも名工や人間国宝と呼ばれる高度で洗練された技術を持つ人々関わっています。ご遷宮では文化や技術を伝えるだけにとどまらず、つくっていく素材を確保していかなく

てはなりません。また伊勢におりますので、ご遷宮といえば「お木曳」と「お白石持」がセットです。神宮と人々がつながる領域があり、この行事によって式年遷宮に参加したという意識が芽生えます。

## Q 遷宮は神職による「まつりごと」と、神領民（伊勢市民）の関わる民俗行事で成り立っている、と。

——神宮の社殿の御用材を運ぶお木曳行事とともに、お社に敷き詰めるお白石を奉獻するお白石持行事は、伊勢市民と全国各地の崇敬者、特別神領民が参加できる行事として続けられ、お伊勢さんへの理解を深めています。全国から参加を受け入れたのは第六十回遷宮のお木曳からですが、

行事の継承に加えて、伊勢に人々を呼ぶ観光的必要要素もあつたでしょう、それは構わない。その時代に応じた形をみなさんが模索し、基本はお伊勢さんを知っていたら、大事なお宮として認識するきっかけになればいいのではないのでしょうか。ご奉仕するマチ（団）の動きも、将来の担い手や技の継承のため、今後は助け合い、支え合いのお木曳・お白石持として展開していくように思います。



御用材を内宮外宮の神域に運び入れる「お木曳行事」（平成18・19年）

# ご遷宮の魅力 若い世代が語れるように

## Q 世の中の動きと遷宮の関係はどう捉えていますか。

——毎年平均して八百万人を超える人々が伊勢神宮を訪れています。式年遷宮では

来訪者の数が瞬時的に大きく増加し、平成二十五年には千四百二十万人という驚異的な数字に達しました。ご遷宮を重ね、認知度やその重要性も高まっていると思います。御杣山の変遷や古儀に戻したりと、その時々により選択肢

を持つご遷宮のあり方は、神宮のみならず日本社会にとっても大切な文化的意義を持っています。

経済的にはグローバル化していますが、一方で逼塞（ひっさく）する世界観があります。そんな状況にあっても神宮には飲み込まれない文化が根底に流れていて、大切に守られていること、小さくとも価値あるものを認識するきっかけになるでしょう。国内だけでなく

く海外にもそれを示していく機会です。

## Q 次回第六十三回の式年遷宮について天皇陛下の御聴許が出されました。

——遷宮の準備をはじめてよろしいというお許しをいただきに御聴許。前回出されたときに印象的だったのは、神宮職員さんの晴れやかな表情です。これからいよいよ始まるという心意気を感じ、こちら喜ばしく思いました。ご遷宮を営んでいくんだという強い決意、新しい時代をつくっていくという気概があり、その明るい展望を少しでも周りにわけていただきたいですね。

時代の移り変わりで、日本だけでなく世界中でさまざまな伝統が崩れてしまうこともあるなか、遷宮の価値を守り伝えていくことは、非常に勇気を与えてくれることだと思います。

若い世代にも大事だと気づいてもらえるようにするのが、わたくしのお役目かと思っています。そうやってご遷宮の魅力をみんなが語れるようになれば、より一層、この文化が広がりを見せるでしょう。



上・長野県木曾谷の国有林にて「御杣始祭」（平成17年）  
下・令和6年4月9日、神宮司庁での御聴許記者会見

（さくら）はるお：皇學館大学名誉教授。専門は宗教社会学、近代神道・神社祭祀研究。1992年、神道宗教学会奨励賞受賞、2018年に南方熊楠賞受賞。近著に『元伊勢・倭姫命を訪ねて』『地域神社の宗教学』『知識ゼロからの神社入門』など。日本宗教学会常務理事・神道宗教学会理事。

伊勢内宮前  
**おかげ横丁**  
おかげさまで  
**30周年**

**伊勢名物 赤福**

本店 〒516-0025 伊勢市宇治中之切町26番地  
電話 0596-22-2154(代) カラダ 0120-081-381  
<https://www.akafuku.co.jp>

# 第六十三回式年遷宮に向かつて

令和十五年(予定)に向け、神宮式年遷宮のさまざまな準備が動き出した。遷宮は、八年の歳月をかけ三十以上の祭りで行事を重ねて行う、日本で最も大きい祭り。それはどのような祭りなのだろうか――

## 遷宮はじまる！

今年、陛下の御聴許を拝し、伊勢のまちは令和十五年の第六十三回遷宮に向けての喜びや期待に満ち、活気づいている。神さまのお引越と

表現されることの多い式年遷宮だが、それは、社殿を新たに建て替えるお遷りだけでなく、社殿にお納めする御装束神宝もすべて新たに造り変え、八年の歳月を掛け、三十以上にも上る祭りや行事を重ねて行われる、壮大で重要な大祭である。

なぜそんなにも丁寧に執り行われるのかといえば、遷宮は、大御神が常に瑞々しくお力を発揮されるようにとの祈りをこめた祭りだからである。一年で最も重要な祭りは、秋に新穀を奉る神嘗祭であるが、式年遷宮は二十年に一度の大神嘗祭、とも考えられている。

## 山づくり・庭づくり・遷御

遷宮は、まず内宮の御正宮である皇大神宮で行われ、続いて外宮・豊受大神宮で行われる。その後、十四の別宮すべてで、建て替えが行われる。遷宮の祭り・行事は、「山づくり」「庭づくり」「遷御」と

大きく三つに分けられる。

神宮の「唯一神明造」の社殿を造る御用材を伐り出し、運び込む段階を「山づくり」といい、遷宮の最初の祭り「山口祭」から「御木曳行事」までを指す。

続いて「宇治橋渡始式」を経て、「鎮地祭」から「後鎮祭」までが、新御敷地で御正殿の建造に関わる祭りで行事である「庭づくり」。

そして、「川原大祓」や「大御饗」など、神さまにお遷りを願う「遷御」に関わる一連の祭りへと進む。

これらの中には、神宮の神職による祭儀だけではなく、柚人の活躍する「御柚始祭」や、伊勢の町衆の力の見せ所といえる「御木曳」「御白石持」などの行事も含まれている。

## 始まりは白鳳時代

式年遷宮は、第四十代天武天皇のご発意により、続く持統天皇四年(六九〇)に第一回遷宮が行われたという。戦国時代に中断を余儀なくされた時



山口祭。五色の幣をかかぎて祭場へと向かう

期もあつたが復興され、永永と続けられて来た。「式年」とは、「定められた年」の意で、遷宮は二十年に一度と定められている。式年の意味については、社殿等の耐用年数による尊厳保持説や、世代交代を見込んだ精神と技術の継承説、十九年七ヵ月ごとに来る朔旦冬至を原点回帰とする説、備(乾かした飯)の備蓄年数による説などが

挙げられており、どれもそれぞれに説得力を持ち、一つの説と定められてはいない。では、天武天皇はなぜ式年遷宮を始めようと思われたのだろうか。遷宮の意義についても多数の説があるが、天武天皇が、この国の精神や文化のおおもとである神宮は変

わつてはならないものだと思いにあり、その姿や技術とともにその祈りの心を、後々まで伝えたいと願われたからではないだろうか。天武天皇の時代には、新しい大陸文化が急激に日本に流れ込み、広がっていた。瓦葺きなど耐久性のある大陸風の建築物が次々に建ち、仏教が広まっていく中で、日本古来の素木と萱葺きの清々しい神殿で行う神まつりを伝えていくために、式年遷宮を発意されたのだろうと考えられている。

## 繰り返し行う意義

二十年に一度、古代のしきたりを伝えながら建て替えられる神宮の社殿は「古くて新しい」といわれる。だが式年遷宮は老朽化による建て替えではない。未来に精神や技術を守り続けていくための智慧なのである。繰り返し継続して行うことによって、神宮は永遠に再現されていく。

## 遷宮の日時定めの沿革について

神宮司庁 広報室次長 音羽悟

遷宮諸祭は山口祭からはじまり、およそ8年余りかけて30以上に及ぶ諸祭・諸行事が斎行されます。平安初期の神宮の古記録によると、日時の選定に関して吉日が定められていたことがわかります。古代においてその仕方は不明ですが、後世は神宮禰宜の注進状が朝廷に上がり、陰陽寮の祈祷で以て日時が選定され、勅下宣旨が下される態勢をとっていました。その勅下宣旨の最も古い例は鎌倉初期の『嘉禄山口祭記』に見られます。

概略を申し上げますと、山口祭と木本祭の日時を先例に任せて勅下していただきたいと造宮使の神祇権大副大臣隆通が上申しており、勅を承って、先例通りの日時を以て謹んで奉仕するよとの左辨官より勅下宣旨が出されています。「先例に任せ」と文中にあるので、この頃には日時勅下は形式化していたのでありましょう。

現行においては、山口祭以下遷御の儀をはじめ、天皇陛下にお伺いを立て日時のお定めをいただく12のお祭りがあります。今日では、このお定めを御治定と称します。

(おとわ さとる) …神宮研修所講師、皇學館大学神職養成室明階総合課程検定講師も務める。著書に『悠久の森―神宮の祭祀と歴史』ほか。



豆腐庵山手  
伊勢市宇治中之切町95番地  
電話 0596・23・5558 木曜定休



生姜糖 一口サイズ

生姜糖 大剣

お多福とともに  
岩戸屋は  
今も昔も内宮前

金時生姜を使った  
岩戸屋の生姜糖



伊勢・内宮前おはらい町

岩戸屋

TEL 0596・23・3188  
FAX 28・1322



第六十二回式年遷宮 主要諸祭・行事

\*○印は日時に陛下の御治定を仰ぐ祭り

年	月	諸祭・行事	祭典・行事の趣旨
平成 17 年 (2005)	5月	山口祭○	内宮は神路山、外宮は高倉山の麓の祭場で、御杣山の口に坐す神を祀る
	5月	木本祭○	心御柱の御料木を伐採する深夜の秘儀
	6月	御杣始祭・裏木曾御用材伐採式	長野県・岐阜県の御杣山で、御神体をお納めする御樋代木を伐採する祭儀。その後、伊勢まで奉搬する
	6月	御樋代木奉曳式	伊勢の地に到着した御樋代木を内宮及び外宮の宮域に曳き込む行事
平成 18 年 (2006)	9月	御船代祭○	御樋代をお納めする御船代の御神木を伐採する祭り
	4月	御木曳初式	役木といわれる代表的な御用材を、縁の深い町の人々が神域に曳き込む行事
	4月	木造始祭○	御造営の木取り作業を始めるに当たって、作業の安全を祈る祭り
	5~7月	御木曳行事 (第1次)	伊勢の市民や全国の崇敬者が、御用材を宮域内に曳き入れる行事
平成 19 年 (2007)	5月	仮御樋代木伐採式	遷御に際しての仮御樋代及び仮御船代のご料木を伐採する祭り
	5~7月	御木曳行事 (第2次)	第一次と同じ
平成 20 年 (2008)	4月	鎮地祭○	新御敷地での最初の祭儀で、大宮地に坐す神を祀る祭り
平成 21 年 (2009)	11月	宇治橋渡始式	新たに掛け替えられた宇治橋を、渡女を先頭に3世代揃いの夫婦が渡る行事
平成 24 年 (2012)	3月	立柱祭○	建物の平安を祈り、御正殿に立てられた御柱を小工が打ち固める祭り
	3月	御形祭	御正殿の妻の短柱に御形を穿つ秘儀
	3月	上棟祭○	御正殿の御棟木を奉揚する祭り。神職らが御棟木を掲げ、小工が打ち固める
	5月	檐付祭	新殿の御屋根に萱を葺きはじめる祭り
	7月	葺祭	新殿の御屋根を葺き終え、御金物を奉飾する祭り
平成 25 年 (2013)	7~9月	御白石持行事	新宮の御敷地に、伊勢の市民と特別神領民が御白石を奉獻する行事
	9月	御戸祭	新殿の御扉に御鑰の穴を穿つ祭り
	9月	御船代奉納式	東宝殿内で御船代を奉彫し、御正殿内に奉納する儀式
	9月	洗清	新殿の竣工に伴い、殿の内外を洗い清める儀式
	9月	心御柱奉建	忌柱、天御量柱とも呼ばれる神秘的御柱を奉建する深夜の秘儀
	9月	杵築祭○	新殿の竣工を祝い、神職らが御正殿の御柱を築き固める祭り
	10月	後鎮祭○	神殿の竣工に際し、大宮地の平安を祈り神殿の床下に天平盆を奉獻する祭り
	10月	御装束神宝読合	四丈殿において、新たに調進された御料を式目に照らして読み合わせる儀式
	10月	川原大祓	遷御前日、奉遷御料や御装束神宝、遷御奉仕員を川原祓所で祓い清める儀式
	10月	御飾	遷御当日、新調された御装束で殿内を飾り、遷御の準備をする儀式
	10月	遷御○	御正宮より新宮へ大御神にお遷りいただく、遷宮の中核となる祭り
	10月	大御饗	遷御翌朝、新宮において初めて大御饗を奉る祭り
	10月	奉幣○	天皇陛下より奉られる幣帛を奉納する祭り。「一社奉幣」として重んじられる
	10月	古物渡	古殿の御物を新宮へお移しする儀式
	10月	御神楽御饗	奉幣の夕、御神楽に先立ち大御饗を奉る祭り
	10月	御神楽○	宮内庁の楽師により、秘曲を含む御神楽を奉奏される、遷宮諸祭最後の祭り

山づくり

山口祭

遷宮の最初の祭。五丈殿での饗膳の儀の後、祭場へ参進し、御杣山の口に坐す神に作業の安全を祈る。白い斎服の神職、青い素襖姿の小工に物忌の童男・童女も加わり、五色の幣が風になびく晴れやかな祭儀。

御杣始祭

御杣山に定められた木曾谷の国有林に祭場を設け、祈りを捧げた後、昔ながらの「三ッ緒伐り」の手法により、斧で御樋代木を伐採する。

御木曳初式

内宮・外宮の御正宮と十四の別宮に、「役木」と呼ばれる重要な御用材を、縁の深い地域の町衆が運び込む。それ

庭づくり

宇治橋渡始式

橋の神である饗土橋姫神社で宇治橋の安全を祈った後、橋の欄干に万度麻を納める。その後、新しく掛け替えられた宇治橋を、渡女を先頭に、全国から招かれた三世代揃いの夫婦たちが渡り初めを行う。

木造始祭

饗膳の儀に続き、宮殿の守り神である屋船大神に、御造営の起工に際しその安全を祈る。手斧始、事始神事とも呼ばれ、古の建築技法さながらに御用材に墨縄が打たれ、木口の本末を切り、手斧を打ち振るう所作を行う。この祭りを終えると、旧神領民が心待ちにする御木曳行事が始まってくる。

上棟祭

御白石持行事

新宮の御敷地に、伊勢の市民らが御白石を奉獻する。御木曳とは違い多くの奉獻団が両宮に奉獻するため、内宮へは五十鈴川を遡る、川曳と奉曳車による、陸曳で、外宮へは、奉曳車と、そり、陸路を運び込む。

立柱祭

御正殿の建築で初めての祭儀。新御敷地で、屋船大神に平安を願う祭儀を行った後、小工が新宮の十本の束柱を貫き支える足固と四間貫の木口を木槌で打ち固め、揺るぎなき建物となるように折る。

遷御へ

川原大祓

遷御の前日、川原祓所で行われる。仮御樋代・仮御船代などの奉遷御料を納める素木の辛櫃、御装束神宝が入った朱や黒の漆塗りの辛櫃がずらりと据えられ、祭主以下、黒、赤、緑の袍に純白の明衣や掛け明衣を着けた神職等が立ち並ぶ華やいだ光景となる。

遷御

大御神に御遷りいただく、式年遷宮の中核をなす祭儀。祭主以下百数十名の神職等が御奉仕する。御祭文奏上、開扉、召立文の読み上げなどを経て、鶏鳴三声の後、勅使が出御を奏上。浄閣の中、道楽の調べに連れて、御列が御正殿から新宮へと進んで行く。

**神宮徴古館**

明治四十二年(一九〇九)、神苑会によって建設された美しい博物館。ルネサンス様式の建物は、同じ倉田山にある神宮農業館とともに国の登録有形文化財となっている。神宮の祭祀や歴史、社殿建築などに関する多くの所蔵資料により詳しく知ることができ、神宮の精神文化まで感じられる展示となっている。

所 伊勢市神田久志本町1754-1  
時間 午前9時~午後4時(観覧は午後4時30分まで)  
休館 毎週木曜(祝日の場合はその翌平日) 12月29日~31日  
URL <https://museum.isejingu.or.jp/index.html>

**式年遷宮記念 せんぐう館**

第六十二回 神宮式年遷宮を記念して、外宮勾玉池畔に建てられた博物館。遷宮の歴史、諸祭、御装束神宝の調進、社殿の建築など遷宮の全体像を、再現品や映像などさまざまな手法の展示によって多角的に見ることができ、外宮御正殿の原寸大再現模型は圧巻。

所 伊勢市豊川町126-1  
時間 午前9時~午後4時(観覧は午後4時30分)  
休館 毎月第2・第4火曜(祝日の場合はその翌日) 展示替え等のため臨時休館有  
URL <https://www.sengukan.jp/>

ゆとりとやすらぎの宿

**神宮会館**

一般財団法人 伊勢神宮崇敬会

早朝参拝のご案内をしています。

<https://www.jingukaikan.jp>

伊勢鳥羽方面へお出かけの際は、観光施設割引がついた乗り降り自由なバスフリーきっぷで!

**1DAY 2DAYs ワイド**

フリー乗降区間や発売場所はHPをご覧ください!

三重交通 TEL.059-229-5511 URL. <https://www.sanco.co.jp/>



神宮の宮域林で育つヒノキ

# 「神宮森林経営計画」

## 大正十二年から始まった未来への森林づくり

式年遷宮の御造営では、太さ、長さ、品質に優れたヒノキが数多く必要となる。この良材を供給する御杉山が伊勢の地から離れて久しいが、伊勢の宮域林では百年前からヒノキの計画的、長期的な育成に着手し、将来にわたり遷宮を支える森林管理を進めている。

令和六年四月、第六十三回となる次期式年遷宮について天皇陛下の御聴許を賜り、神宮において本格的な準備が開始しました。前回の遷宮では、神宮の森で育ったヒノキが約七百年ぶりに式年遷宮の御造営に供される御用材となりま

### 神域と周辺への森林を一体的に管理

式年遷宮の御用材となるヒ

ノキは、初めての遷宮が斎行された約千三百年前から五百年ほどは、伊勢の地にある神宮の森を御杉山（御用材を伐り出す山）として伐り出されました。しかしながら、次第にヒノキの良材は減少し、鎌倉中期以降の御杉山は三重、愛知、岐阜県へと場所を移し、江戸中期からは長野、岐阜県の本曾山に移って今日に至ります。

その後の神宮の森は、江戸時代にはお伊勢参りのおもてなしに必要な薪炭材の採取が続き、明治時代に国有地とな

なってきたものですが、ここからは、二回に分けて神宮の森の沿革、神宮森林経営計画の内容、具体的な森林管理の方法や式年遷宮への展望などについてご紹介します。

その後の神宮の森は、江戸時代にはお伊勢参りのおもてなしに必要な薪炭材の採取が続き、明治時代に国有地とな

なってきたものですが、ここからは、二回に分けて神宮の森の沿革、神宮森林経営計画の内容、具体的な森林管理の方法や式年遷宮への展望などについてご紹介します。

その後の神宮の森は、江戸時代にはお伊勢参りのおもてなしに必要な薪炭材の採取が続き、明治時代に国有地とな

なってきたものですが、ここからは、二回に分けて神宮の森の沿革、神宮森林経営計画の内容、具体的な森林管理の方法や式年遷宮への展望などについてご紹介します。

# 式年遷宮の森林を未来へ

前編

神宮司庁営林部長／神宮技監 松永彦次

### 自給自足に舵を切る

百年前に定められたこの

計画は、森蔵や景観の維持、五十鈴川の水源かん養、御用材の供給といういずれも神宮にとって欠かせない重要なことを持続させるものであり、現在の世界共通の目標であるSDGsの考え方と相通するものがあります。こうした先見性のあった計画は、昭和、平成、令和と移りゆく時代の中でもしっかりと根付き、百年たつた今も計画と実行が乖離することなく、色あせるこ

とのない骨太な計画として存在しています。そして、何よりも特筆すべきことは、百年前に神宮が御用材となるヒノキを伊勢の地で再び自給自足することに大きく舵を切ったことです。資源の枯渇を心配する必要のない持続的な供給体制の構築を計画された先見の明に、当時の方々の式年遷宮を守り続けるための熱意の大きさを感じざるを得ません。

（まつなが ひこじ）：平成三年、林野庁入庁。静岡森林管理署長、近畿中国森林管理局計画保全部長等を経て令和四年より現職。

### 神宮の森を三つにゾーニング

神宮森林経営計画では、神宮の森を神域、第一宮域林、第二宮域林の三つにゾーニングし、神宮にふさわしい森蔵を保つ必要がある神域と第一宮域林は禁伐としています。また、ヒノキを主として仕立てていく第二宮域林においても、風致の維持、五十鈴川の水源かん養を目的として針葉

樹と広葉樹が混交した森林を目指しています。そして、神宮の森の約二分の一となる三〇〇〇ヘクタールにヒノキを主とする森林を造成することにより、御用材を必要量伐採しても水源かん養機能などを損なうことなく、将来にわたり持続的なヒノキの供給が可能であるとして計画がスタートしました。

### 伊勢志摩国立公園と神宮の森

伊勢志摩国立公園は、伊勢神宮の森など自然豊かな森林環境に代表される内陸のエリアと、リアス海岸に代表される海沿いのエリアから構成されています。このうち神宮の森は公園全体の約1割の大きさですが、特別保護地区では9割、第一種と第二種特別地域では6割が神宮の森であり、国立公園の中でも特に貴重な自然が多く残されています。

同公園は昭和21年(1946)、戦後第一号の国立公園として指定されましたが、神宮が国の機関でなくなり、戦後復興への木材の供給や盗伐など様々な圧力にさらされる中、神宮の森を守る上で早期の公園指定を神宮としてもお願いしたと言われています。

今では、景観としての価値のほか、貴重な照葉樹林、暖帯林としての位置づけや、そこに生息する多様な動植物、また、五十鈴川から伊勢湾へと連なる水系が果たす役割、さらには多くの国民が参拝される伊勢神宮が鎮座する場所という文化的価値など、伊勢志摩国立公園と神宮の関わりは非常に深く、互いにその価値を高め合う関係となっています。



神宮林は国立公園のほぼ1割を占める



五十鈴川の源流は神宮の森にある

伊勢志摩観光の拠点に  
鳥羽湾の絶景を望む  
湯めぐりリゾートホテル

湯めぐり海百景  
鳥羽シーサイドホテル

〒517-0021  
三重県鳥羽市安楽島町1084  
☎ 予約専用 0599-25-8181

私の旅行スタイル、ふるさと納税。

鳥羽市ふるさと納税

鳥羽に旅行するなら「宿泊観光周遊券」が絶対お得！  
寄附金額の3割分の宿泊観光周遊券をお贈りします。

鳥羽市観光協会

# 伊勢のお木曳行事 調査団レポート①

事務局 伊勢文化舎 TEL 0596-23-5166

## 伊勢市民が関わることのできる ご遷宮の民俗行事を未来へ託す調査団を結成

天皇陛下の御聴許を受け、伊勢市内の各方面で着々と準備が進行中。地元伊勢の住民にとってご遷宮といえば「お木曳行事」と「お白石持行事」。数ある遷宮行事の中でも、唯一伊勢市民である神領民や崇敬者が関わるることのできる行事で、無形民俗文化財に指定され、予定では「お木曳行事」は第一次が令和八年、翌年に第二次が行われます。

ご遷宮に関わる喜びに湧く一方で、少子高齢化への対策も聞かれ、曳き手の確保や



お木曳行事の陸曳は外宮へ奉曳

費用面での団の維持など、継続していけるよう模索するところもあります。

今後もこの民俗行事をよりよいかたちで次代へ継承して

いきたいと、このたび、皇學館大学、伊勢御遷宮委員会、伊勢文化舎が連携し、伊勢のお木曳行事調査団（团长・櫻井治男氏）を結成し、昨年十月に設立総会を開催するに至りました。



令和5年10月、調査団の設立総会

調査活動の内容は次の通りです。（1）「お木曳行事」に関する調査、（2）若者の学習機会づくりと行事参加への諸活動、（3）お木曳行事及び遷宮に関する講座、シンポジウム等の開催（4）お木曳行事及び調査に関する広報等活動。長期的な視点をもちつつ、未来へとこの行事をつないでいきたいと考えています。

### 「お伊勢さん御遷宮事典」令和八年春に発刊予定

神宮、遷宮、お木曳行事、お白石持行事について、一冊に分かりやすく解説した『事典』を、次期の御遷宮記念として調査団と伊勢文化舎で、現在、編集中です。伝統文化の継承が年々難しくなっている折、出版を機に若い人たちに遷宮やお木曳、お白石持などに関心を持ってもらい継承につなげたいと企画しました。執筆者は神宮職員、皇學館大学・國學院大学の教員、有識者の約三十数名で構成。A5版二三〇頁前後。約三〇〇項目を取り上げます。発行は伊勢文化舎。（二）

## 学生とともに地域で学ぶ 伊勢のお木曳行事調査団の立ち上げ

調査団副团长／皇學館大学 文学部神道学科教授 板井正幸

前回の「ご遷宮時に「伊勢のお白石持行事調査団」をお手伝いしたことが縁で、このたび「伊勢のお木曳行事調査団」の立ち上げから携わることとなりました。私にとってご遷宮は三回目の体験です。伊勢で学ぶ者の一人として、これまでいた

は平成十八・十九年に行われ、お白石持行事は平成二十五年でした。それぞれの行事から十七年あるいは十一年が経ったことになりました。奉曳団や奉獻団を支える地域の状況を人口と高齢化率で見ると、この間に人口は一万二千人程減少し、六十五歳以上の高齢化率は、九割程度上昇しています。その一方で、当時生まれたばかりの子は中学生や高校生

に育っており、次回行事での活躍も期待されます。前回の「お白石持行事後、大学生を対象に行ったアンケート調査では、行事へ参加して満足度の高かった学生の約八割が次回も参加したいと答えています（「お白石持行事調査報告書」）。また平成二十八年に伊勢志摩地域の中学生から大学生を対象に行ったアンケート調査では、地域の祭礼行事へ六割が参加したいと回答し、特に中学生が最も高い割合でした（「伊勢志摩みらいづくり調査報告書」）。



（いたい まさなり）…大分県生まれ。神宮本庁教学委員、同教化講師、三重県文化財保護審議会委員も務める。

行事をめぐる要因の変化を冷静に踏まえつつも、若い世代の高参加が高満足を生み出し、充実した継承へとつながる可能性も指摘できそうです。奉曳団・奉獻団の組織化をはじめ、奉曳や木遣り、荷締めなどの技術がどのような思いでどのように受け継がれていくのかを学生とともに学んで参ります。

## 調査団 連携団体ニュース 伊勢御遷宮委員会

伊勢の官民がともに手を携え、未来のご遷宮へとたすきをつなげる組織として平成二十七年四月に発足。「お木曳行事」「お白石持行事」を中心に準備を進めている。

万歳三唱を終えると、夜空には花火が打ち上げられた。次期式年遷宮に数を揃えて六十三発放揚。駆けつけた市民たちからは歓声が上がります。ご遷宮への期待もふくらむひとときとなった。

### ●お木曳に向け、初めて準備委員会を設置

令和六年二月、お木曳に向けて市民らの機運を高め、奉曳団の結成や準備などを促して補助する組織「次期神宮式年遷宮用材奉曳本部・奉曳団連合会結成準備委員会」を設置。伊勢御遷宮委員会が準備委員会を設けるのは初めてのこと。伊勢市や伊勢商工会議所などの関係者らで構成する。

次世代を担う子どもたちにお木曳行事を知ってもらい、参加につなげようというロゴマークを制作。奉曳する御用材を正面に采を振る木遣りの子どもや扇子を持つ子どもが描かれ、躍動感とインパクトのあるデザイン。担当したのは伊勢市出身のお木曳の経験もあり「小学生の頃に特別な行事としてワクワクした気持ちで参加した」という。多くの子に参加してもらいたいというPRしている。（二）



### ●子どもお木曳 ロゴマークが完成

●御聴許を受け、宇治橋前で奉祝

次期神宮式年遷宮の準備が決定したことを祝い、発表のあった四月九日夜七時より、内宮宇治橋前広場にて奉祝行事を行った。

委員会で役員と采と提灯を手にした伊勢神宮奉仕会青年部が宇治橋前に整列し、内宮に向かつて遙拝。その後、鈴木健一会長（伊勢市長）と山野稔委員長（伊勢商工会議所会頭）があいさつし、奉仕会青年部が今回新たに作った木遣り唄を三本披露（表紙）。晴れやかに力強く、唄い上げた。

ウェブ配信動画 「神都・伊勢のご遷宮『始動』」  
伊勢御遷宮委員会 公式 YouTube  
伊勢御遷宮委員会 ホームページ  
TEL : 0596・25・5215

## お伊勢さん関係の出版物のご案内

ご購入は 伊勢文化舎のHP、アマゾンで。



第62回ご遷宮記念  
**伊勢のお木曳**  
神領民のこころと技を伝える、お木曳行事の全てが分かる本。全79奉曳団を完全収録。  
1,540円(税込)  
B5判 256頁



改訂版  
**お伊勢さん 125社めぐり**  
伊勢神宮の摂社・末社など、全125社の鎮座の由緒や周辺の歴史・文化を解説した、持ってあるけるガイド本。  
1,430円(税込)  
A5判160頁

お問い合わせ 伊勢文化舎 TEL 0596-23-5166 FAX 0596-23-5241  
E-mail otayori@isebito.com HP http://www.isebito.com/

## お子様向け出版物のご案内

ご購入はアイブレンまでお電話頂くか、HP又はアマゾンで。



神話と伊勢  
日めくり万年カレンダー  
個性あふれる神さまたちの31日のショートストーリーです。  
1,100円(税込)  
A5 サイズ化粧箱入り



犬のおかけ参り絵本  
おかけ参り犬 おさん  
犬がおかけ参りをしたという伝承にもとづく創作絵本です。  
1,540円(税込)  
A4変形 本文 40頁



子どものおかけ参り絵本  
伊勢まいりんくんがやってきました!!  
伊勢まいりんくんは、(公益)伊勢市観光協会の公式キャラクターです。  
1,500円(税込)  
A4変形 本文 44頁

お問い合わせ アイブレン TEL 0596-27-1111 FAX 0596-23-0125  
E-mail ibrain@mie-net.ne.jp HP http://publishing.mie-net.ne.jp/

伊勢志摩のまつり暦

7月

6日(土) しろんご祭
ホラ貝の合図で海女たちが海に潜り、最初に獲ったつがいのアワビを白髭神社に奉納する。

6日(土) 潮かけ祭り
海の安全と大漁を祈願し、船上から潮をかける奇祭。800年の歴史を持つ。

7日(日) 柴燈大護摩
地元では「ごまさん」と親しまれている。家内安全、豊作、豊漁を祈って7回護摩を焚く。

13日(土) 第72回伊勢神宮奉納全国花火大会
全国から選ばれた花火師たちが一年の安全を祈願し、神宮に花火を奉納する。約7000発の花火が上がる。

14日(日) 河崎天王祭
河邊七種神社の夏祭り。中橋通り周辺で神輿やメロディ鼓笛、河崎音頭、屋台などで賑わう。

26日(金) 第69回鳥羽みなとまつり
金刀比羅宮鳥羽分社の例大祭。水中花火や打ち上げ花火で賑やかな夜。

27日(土) 8月18日(日) 第27回伊勢の匠展
お伊勢参りの旅では職人たちの手仕事で作られた土産物が人気。その伊勢路に伝わる工芸品を展示する。

8月

1日(木) 外宮さんゆかたで千人お参り
八朔参宮の風習を伝える行事。ゆかたで外宮を参拝し、夏の風情を楽しむ。

8月

4日(日) 風日祈祭
農作物や五穀の実りが、雨風の災害なく順調で豊かであるよう、御幣帛を捧げて祈る。

15日(木) かんこ踊り
かがり火を中心にシヤグマと呼ばれるかぶり物と腰巻を着けて羯鼓を叩いて踊る。県の無形民俗文化財。

17日(土) 18日(日) 佐瑠女神社例大祭
芸能の神である天宇受売命がおまつりされている佐瑠女神社の例祭。

25日(日) 愛洲氏顕彰祭、剣祖祭
剣道の始祖、愛洲移香齋を偲び日本各地や、海外からも剣の達人が集まる。各流派演武者による武芸が奉納される。

9月
上旬 抜穂祭
神嘗祭や諸祭典で神様に奉る新米を収穫する神事。

8月

5日(土) 夫婦岩大注連縄張神事
夫婦岩に大注連縄を新たに張り渡す神事。年に3回行われる。

14日(土) 15日(日) 安乗の人形芝居
400年以上にわたって継承されている伝統芸能。安乗神社の秋季例大祭で境内の舞台上で人形芝居が奉納される。

14日(土) 29日(日) 第30回来る福招き猫まつり
福をまねく「招き猫」たちの感謝祭。作家による創作招き猫の展示・販売や絵付け体験などの催しがある。

15日(日) 第70回守武祭俳句大会
俳諧の祖とたたえられる荒木田守武の遺徳を慕う俳人によって行われる。俳句大会・俳句大会付・11時〜12時

17日(火) 神宮観月会
全国から献詠された短歌と俳句の秀作が冷泉流の作法で披露され、楽師たちによって雅楽が奉納される。

17日(火) わらじ祭り(神事)
ダンダラポッチの民話に由来する祭り。豊漁と平穏無事を願い、波切神社で神事のおと須場の浜で2日の大きなわらじを海に流す。

21日(土) 23日(月) 秋の神楽祭
神恩感謝を捧げ、国民の平和を祈って、内宮神苑の特設舞台上で神宮舞楽が一般公開される。春と秋に行われる。



外宮さんゆかたで千人お参り

ミュージアム情報

高宮歴史博物館

7月6日(土) 9月1日(日)
夏季企画展「高宮・常設展示室Ⅲ その④ 「高宮の食卓」平安時代の人々は何を食べていたのか?」

神宮徴古館

開催中(9月10日(火) 閉館)
特集展示「和—文化と芸能—」別館日本に昔からあるハレの日に用いられていた文化や芸能を、絵画や道具などを交えて展示。

神宮美術館

7月26日(金) 8月27日(火)
特別展「和—歌会始御題によせて—」皇室新春「歌会始」の御題「和」によせて近代の美術工芸品を展覧する。

寶日館

7月20日(土) 8月31日(土)
夏休み特別企画展「昔のお道具展」今は懐かしい暮らしの道具を展示。自由に触れる道具もあり、暮らしの変化を感じられる。

鳥羽市立 海の博物館

7月6日(土) 9月30日(月)
写真展「大宮半島の生きものたち」海の博物館ギャラリー

7月13日(土) 10月20日(日)

特別展「たとえならは、海の○○」特別展示室

7月13日(土) 10月20日(日)

「海の○○」とたとえられる海の生物や関連事象について、漁獲道具や絵画など交えて紹介する特別展。

ご案内

令和7年新装版「伊勢の神宮カレンダー」

10月1日より販売予定



修・編集の神宮司庁監、と、神宮の美しい風景や祭典の様子など全7枚で綴られたカレンダーです。神宮参拝や日々の暮らしにご利用ください(祭典・諸行事の日程、六曜掲載)。

ご注文・お問合せ 神宮会館 TEL 0596-22-0001 FAX 0596-22-1517

オンライン講座開講 7月から3回シリーズ

テーマ「倭姫命と現代日本人へのメッセージ」



昨年末の「東京講座」に続く「倭姫命」をテーマにした講座をオンラインで行います。

命の伝承「倭姫命世記」と世界の神話の一つであるギリシャの国づくり神話を比較し、そこから見えてくるもの、また命の「巡行の旅」がめざした意味や、現代とどのように繋がるかについても探ります。

講師はラフカディオ・ハーン(日本名・小泉八雲)研究の第一人者の池田雅之先生で、専門の比較文化・比較文学から、3回にわたり熱く語っていただきます。

第1回 7月27日(土)
第2回 8月31日(土)
第3回 9月28日(土)
時間 19時〜20時30分
定員 100名
(定員になり次第締め切ります)
会場 ZOOM機能を使っておこなうオンライン講座。

講師 早稲田大学名誉教授 池田 雅之氏
主催 (有)伊勢文化舎
後援 伊勢市/伊勢市教育委員会
お申込み (電話での申込みはできません)
ハガキ、メール otayori@seibio.com
お問合せ TEL 0596-23-5241

516-0008 伊勢市船江2丁目2-2125 詳しくはリーフレット版(QRコード)をご覧ください。

配布・購読のご案内

本紙の配布先▷【三重県内】神宮(内宮・外宮・別宮)、伊勢志摩エリア各市町の観光協会、観光施設、土産飲食店等、近鉄の主要駅【三重県外】近鉄の主要駅、東京大神宮(飯田橋)、三重テラス(日本橋)、全国の神社庁ほか
購読の場合▶5部まで300円(送料込)住所、名前、電話番号、メールアドレス、部数を記入し、伊勢文化舎までお送りください(切手可)。



ニュース1号・2号がダウンロードできます

編集長雑感

「何歳のときに遷宮を迎えるか」。これは伊勢に生まれた者にとって人生一つの節目でもある。はじめての遷宮は2歳だった。記憶はないが、はつぴに鉢巻姿の写真を見つけた。神領民には遷宮の思い出をより深く刻むお木曳やお白石持がある。御聴許ニュースを聞き、ご近所の長老が口にした「そろそろ始まる」の一言には次へ向かう喜びがあふれていた。(元美)

次号は 令和6年10月上旬発刊予定

スタッフ
発行人 中村賢一
編集長 中村元美
編集 福所淳子 出口伊都穂 堀口裕世
制作 高木恵奈(アイブレーン)
印刷 大享印刷(株)



Shimakaze train advertisement including route map, train image, and contact information for special fares.